

# 【8】帷子里・神戸村・神明宮

横浜市保土ヶ谷区天王町（帷子町）



「お泊りはよい程谷と留め女、戸塚前では放さざりけり」とは『膝栗毛』の中の戯れ歌である。画中の人物は細かいので、判別しにくい、何人かの留め女が店先へ出ている。神奈川の次の宿、保土ヶ谷に入った。

提灯を掲げて飛脚が走っている。その左に神明社の一の鳥居が見える。

長い参道沿いに並木が続いている。並木を抜けると川がある。今井川といい、帷子川の支流で、昔からよく出水した川である。

橋をわたると「両脇ニワヅカノ石垣アリ 高サ二尺（約六〇センチ）

ある。

神域には境内社が多い。社史によると一三社、一六座にのぼる。主神は天照皇大神である。

絵でははっきりしないが、この神社の横を相州道が通っている。

この宿は、ほかにも八王子道や金沢鎌倉道などが通っていて、人の往来が盛んであった。

様々な人が、各人各様の思いを抱いて社前に額づいたことであろう。

この宿は、『江戸名所図会』の本文によるとかつては帷子町上下・岩間町上下・神戸町上下で成っていて、帷子の里と呼ばれていたという。

帷子の意味は、一方が急斜面になっている地形のことで、つまり片平のことであるといわれる。



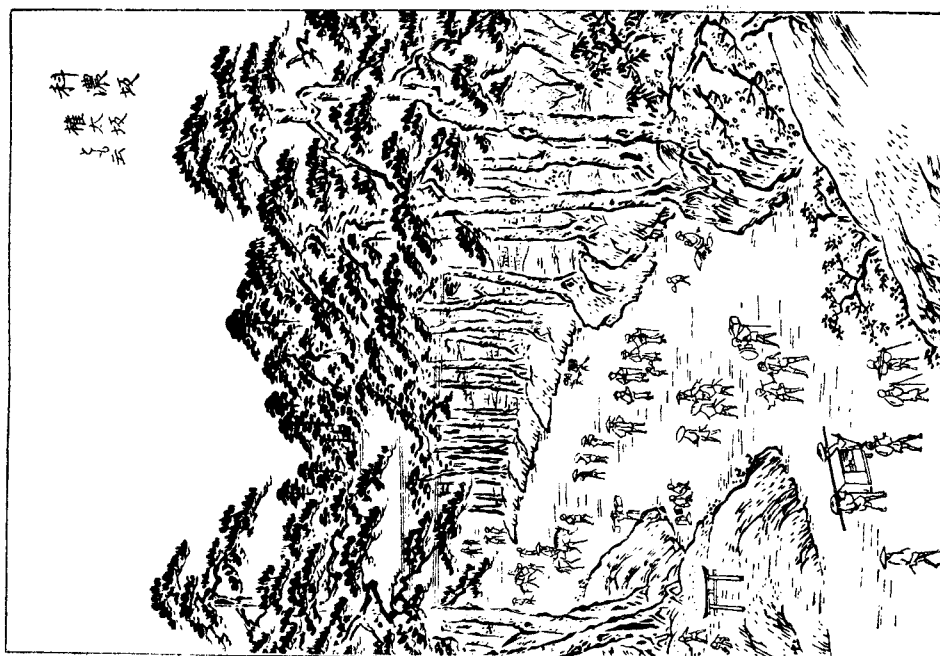
ちバカリ 上二竹ノ矢来ヲナセ  
リ コノ所ハ前ニ今井川流レテ  
一ノ鳥居ヨリ十二町（約一三〇  
メートル）バカリヲヘダツ」

（『新編武蔵風土記稿』）

左右に伸びる道は、旧東海道で

## 【9】科濃坂

□ 横浜市保土ヶ谷区権太坂く平戸四丁目



あった。道の両側には、亭々と松樹の大木が並び、根元は、みことな根張りを見せている。

『江戸名所図会』の本文でいう「老樹左右に森列たり」の森列の意味が理解できそうである。

保土ヶ谷宿を抜け、西へ進むと長い上り坂になる。

権太坂という名がついていた。普田坂とも書かれた。現在も長坂で息が切れる。坂をのぼりつめて、峠を越えるとこちらは戸塚区側で科濃坂と呼ぶ。今は品濃坂と書く。「此地は武相の国界たり。坂道の両傍には、蒼松の老樹左右に森列たり、坂の上にて右を望めば、芙蓉の白峯玉をけつるが如く、左を顧れば鎌倉の遠山翠黛濃かにして……」

今も富士山が見えることがあると土地の人は胸を張る。

この峠は東海道の最初の難所で

右手の路上に腰をおろし、幼児を抱いている人の前にいる少年の様子は、通行人に乞い求めている様に思える。もう一人の少年も、女連れに近寄って、同じ仕草をしているようである。左手の鳥居のそばにも、子供が二人いるが、これは遊んでいるのだろう。

峠を間近にした所に投込塚がある。この地で行路半ばに亡くなった人達の悲しい人生が痛ましい。



「投込塚之跡」の碑

【10】境<sup>さかい</sup>

木<sup>き</sup>

回 横浜市保土ヶ谷区境木本町



境木  
去人の杯<sup>さかづき</sup>  
武蔵相模の  
境<sup>さかい</sup>を故<sup>ふる</sup>よ  
傍<sup>そば</sup>の  
杭<sup>かき</sup>を建<sup>たて</sup>  
る<sup>たて</sup>が  
名<sup>な</sup>あり

境木とは、絵の説明にあるように武蔵国と相模国の国境を標示する木柱のこと、一説に境内の大榿<sup>けい</sup>を指したともいわれる。

ここは立場<sup>たちば</sup>で、日本橋を立ち品川宿・川崎宿・神奈川宿・保土ヶ谷（程ヶ谷）宿を過ぎ、次の戸塚宿との中間の位置にあつた。

ここでは、人足や馬が雇えた。

「この地牡丹餅<sup>ぼたんもち</sup>を名産とす。これを製する店、両三家あり」と

『江戸名所図会』の本文はいう。

栗<sup>あ</sup>の牡丹餅であつた。売っていたのは、長四郎という百姓一人の名前が伝わっている。

峠の頂上に地藏堂がある。良応

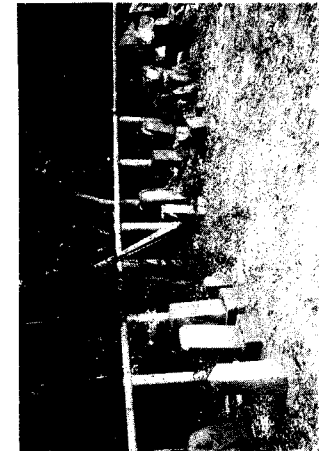


院と号し、道中の安全を願う者や江戸からの講中の団体たちが立寄っていた。堂の後ろの鐘は長いこと旅人に時を告げ、山々に響いた鐘である。

今、金比羅詣<sup>きんぴらぎ</sup>での夫婦が一心に



地藏堂



地藏堂裏の無縁塔

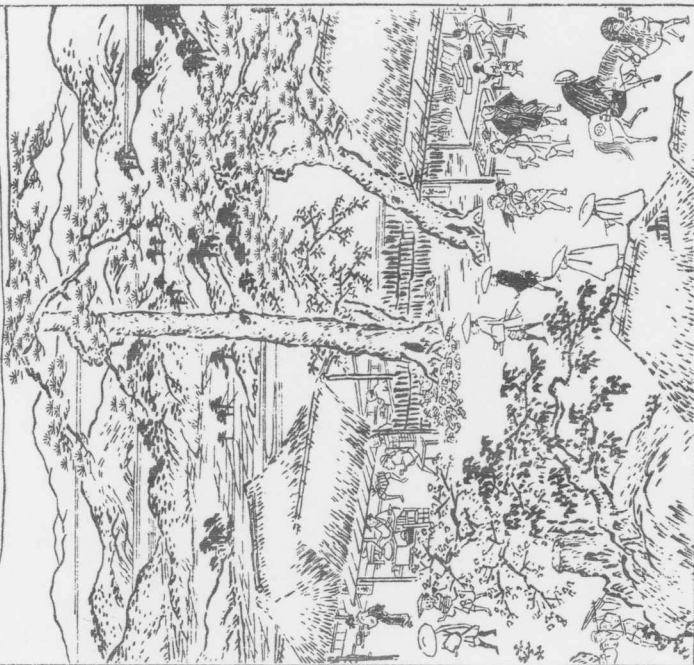
【10】境<sup>さかい</sup>

木<sup>き</sup>

□ 横浜市保土ヶ谷区境木本町

境木

夫の杯<sup>さかづき</sup>なり  
武蔵相模の  
境<sup>さかい</sup>の故<sup>ふる</sup>よ  
傍<sup>そば</sup>の  
柁<sup>しほ</sup>と建<sup>た</sup>  
る<sup>た</sup>なる  
此<sup>こ</sup>名<sup>な</sup>あり



境木とは、絵の説明にあるように武蔵国と相模国の国境を標示する木柱のこと、一説に境内の大櫓<sup>けしき</sup>を指したともいわれる。

ここは立場で、日本橋を立ち品川宿・川崎宿・神奈川宿・保土ヶ谷（程ヶ谷）宿を過ぎ、次の戸塚宿との中間の位置にあつた。

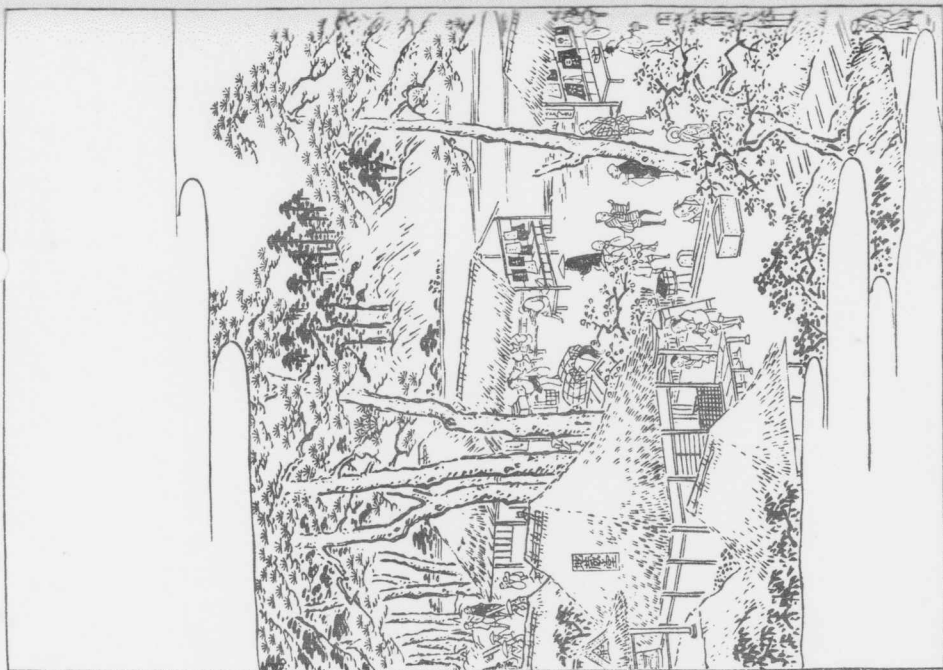
ここでは、人足や馬が雇えた。

「この地牡丹餅<sup>ぼたんもち</sup>を名産とす。これを製する店、両三家あり」と

『江戸名所図会』の本文はいう。

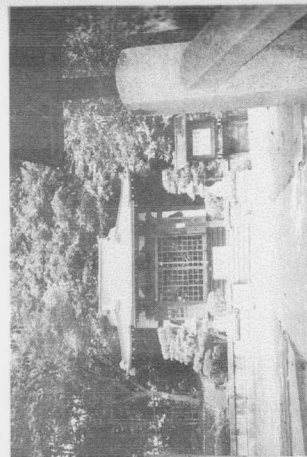
栗<sup>あま</sup>の牡丹餅であつた。売っていたのは、長四郎という百姓一人の名前が伝わっている。

峠の頂上に地藏堂がある。良応



院と号し、道中の安全を願う者や江戸からの講中の団体たちが立寄っていた。堂の後ろの鐘は長いこと旅人に時を告げ、山々に聳<sup>たつ</sup>た鐘である。

今、金比羅詣<sup>きんぴらぎ</sup>での夫婦が一心に



地蔵堂



地蔵堂裏の無縁墓

念じている。

茶店の傍の松の根元には、捨てた草鞋がうず高く積んである。

山道での道中は、特に草鞋の傷みが早い。だから、この峠ではきかえる人も多かつたに違いない。はきかえる人は身体が丈夫だからである。そして再び踏出す。一方堂の裏手には、いくつもの無縁墓が転がっている。

この峠を越えることなく終った人たちにゆかりのあるものである。

地藏堂の周囲に、巨木が茂っている。

ここを過ぎると下り坂になる。両側から長く枝が伸びて、昼なお暗い感じのする場所が残っている。江戸時代は、このような感じの道があちこちにあって珍らしくもなかったと思われる。

下り切ると鞍部になり小流をわたる。品濃川の源流である。そして再び短かい上り坂になる。その頂きに科（品濃一里塚が両側にある。

日本橋から九番目（約三五・三キロメートル）にあたる。旅人に距離を知らせ、休息の木蔭となり、駕籠や賃馬の金額の目安にされていた。

このあたりの農家は畑作が主であつて、農閑期には街道へ出ての人足など、日銭稼ぎの賃仕事に精を出していた。田んぼは無かつた。

ところで、ここまで来た作者は一里塚を見ることもなく引き返し、横浜方面へもどつていったようである。なぜなら、一里塚についての記述が見あたらない。場所が相模国にあるので、触れる必要はないと考えたのでもあろうか。

## 【11】 横浜・弁財天社

### 回 横浜市中区・大岡川河口付近

再び横浜へもどり、今度は海沿いを選んだ。中央に美しく伸びた砂洲は右手の大岡川や海の波の作用でつくられたのであろう。

今日と比較すると、息をのむような自然の美が展開している。

おだやかな海面に白帆が浮かび、追風を受けて一様に動き出している。

江戸湊まで海上八里の船旅であつた。

この当時の舟運は、人よりも年貢や建築資材・生活物資などの運搬が主であつた。しかし、しだいに水路が開け、江戸、木更津方面や三浦方面との行き来が盛んにな

つていった。

手前、右の芒村（のぎむら）というのは今の野毛町にあたる。

当時は海浜の村落であつた。

左の海面に突出している小島は姥島（うばしま）という。

その位置は、今の桜木町駅近辺であつたとされるが、明治三年、新橋・横浜間に鉄道工事が行われた際、海面を埋め立てたので地中に埋没してしまつた。

海面に姿を見せていたときは、戸部の断崖を背に、青い海の中でよく目立つたことであらう。

砂洲の松林の中から弁天様の屋根が覗いている。明治二年、今の